

第26期 国立市社会教育委員の会（第5回定例会）会議要旨

令和7年9月24日（水）

〔参加者〕 内田、寺澤、堀、荒井、横山、田代、大森、松塚、生島

〔事務局〕 井田、楠本、関

生島議長 第26期国立市社会教育委員の会第5回定例会を開会いたしたいと思います。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

本日は、根岸委員から御欠席の連絡をいただいております。それから、大森委員がちょっと遅れるということで御連絡をいただいておりますが、定足数に達していますので本日の会議を始めたいと思います。

それでは、まず、本日の配付資料につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

事務局 事務局から、配付資料について説明させていただきます。皆様から見て左側にある資料ですが、資料1、A3判のものになっております。令和5年度国立市事務報告書/2024年公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団事業報告書/令和6年度社会福祉法人くにたち子どもの夢・未来事業団事業報告書の一覧表となっております。

続けて、右側に置かれております資料のほうが第26期の第4回議事録、そして公民館だより、図書室月報、いんふおめーしょんとなっております。

資料の説明については以上です。

生島議長 ありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、次第1に入っていきたいと思います。ライフステージに応じた学習機会充実のための事業について、諮問内容についての議論を進めてまいります。

事務局のほうから、非常に多くの資料を9月の中旬頃に皆様方に送っていただきました。先月お休みされていたので、びっくりされているんじゃないかと思います。

事務報告書なので、本当に多くの事業があって、その中でも市民向けに学習機会を行っている部分をピックアップしていただいていた。それから、資料自体が分かりにくかったのも、該当するようなものに黄色でマーカーをしていただいているというようなものでした。

さらに、打合せの段階では、黄色いものもあるんですけれども、書きぶりが全部違いましたので、それが一覧に見えるような形のほうがいいだろうと思ひまして、事務局のほうに取りまとめたいただいたものが今日お配りしております3番のものになっています。要するに、どんな事業をやっているかという事業リストです。ですから、詳細を見るためには、お配りいただいた資料について戻っていただくと分かるというようなことでまとめたいただいたんですけれども、事務局のほうでまとめてもらうに当たって少し補足説明をいただければと思います。

事務局 事務局から説明させていただきます。まず、今回郵送させていただいた事務報告書なんですけれども、本日お持ちいただいている方はいらっしゃいますでしょうか。大丈夫でしょうか。こちらを本日使いますので、よろしくお願いいたします。

郵送したものについて、黄色いマーカーがついたものが資料1のA3判にリ

ストとして載せました。黄色いマーカーのところを全部書いたつもりではいたのですが、申し訳ありません、一部抜けていた部分がございますので、今から説明させていただきます。

そうしましたら、A3判の用紙の3ページ目を御覧ください。3ページ目のリストの下から6行目のところにありますタイトルが「まちを知る、地域から学ぶ 地域史・地域資料」というところと、その下の「まちを知る、地域から学ぶ 社会教育学習会」の間に、抜けています。事業名が「公民館主催に係る事業」「【まちを知る、地域を学ぶ】地域防災」が入ります。追記をよろしくお願いいたします。

もう一点ございまして、4ページ目を御覧ください。真ん中のほうに書いてあります、事業名が「公民館主催に係る事業」の「【表現と創作を楽しむ】はじめての銅版画」というところなのですが、全4回となっておりますが、全5回となります。追記をよろしくお願いいたします。以上になります。

生島議長 ありがとうございます。今回の目的が、まず国立市において学習機会というのがどのように設けられているのか、行政、または市のほうから提供している講座というものを、生涯学習ですから、何も教育委員会のものというだけでもないで、広く見てみようということで、それに関わる資料というのをこのように御提示いただいて見てきていただいたということになります。

ここから、ライフステージというものをどういうふうに考えていけそうなのか、または考えていくに当たってのヒントとしてこういうものに注目したとか、こういうところが欠けているように感じるということもあろうかと思えますし、または前回お話がありましたけれども、社会的な背景に即して経てきた年代という視点というのも捉えていくことが必要なんじゃないのか。そういう意味では、年代に即した学びというものを提供していく、または世代を超えてといったときの何か背景というものも含めて考えていくことが必要なんじゃないかということもありましたので、そんな視点をお持ちいただいてもいいかなと思います。

今日は、本当に多くの資料がありましたので、率直に資料を見てみてどうだったという、こんなことをやっているんだというようなレベルからでもいいと思いますし、今みたいな世代の話とか、率直に気づきをお話しいただいて、たくさんそういうお声をいただければいいなと思っています。

先に見通しを申し上げておこうかなと思うんですけども、今日そういうふうにお出しいただく中で、お互いにキャッチボールをしていくと、こんなことをしてみたいよねとか、こういうポイントに注目していきたいねというようなところが出てくればいいなと思っているんですが、それに向けて今度どうするかという議論を来月の会議でして、何か少し動きをつけられればいいなというふうに思っています。

その意味でも、今日は皆さん方でざっくばらんにこの資料から見えてきたこと、それは数的なものでもいいかと思えますし、質的な、テーマ的なものでもいいかとも思えますので、お出しいただきながら次回に結びつけていこうというふうに思っております。

そういう意味でも、今回、要するに、内容的なこともそうですけど、数的なことも見えればいいなということもありまして、事務局と一緒に事前に表の枠組みをつくってまとめてみたというところがありますので、こちらのほうに注目していただきながらも結構かなと思っています。どちらからでも結構なんですけれども、本当に率直なところから構いませんので、お気づきになった点であるとか、またはこういう事業に出てみたけれどもこうだったというようなことがあってもいいかとも思います。事務局からも、振りとしては、

注目できるところをピックアップしてというようにところでお題が出ていたかと思いますが、ぜひお声を発していただければと思います。

では、堀委員、お願いいたします。

堀委員 言い出しっぺで、率直に言います。

生島議長 ありがとうございます。

堀委員 配布資料では、物すごく丁寧なことをしていただき恐縮です。事前に送ってもらったのは、市役所の事務報告書の各課の記述の中で、市民向け講座や行事の報告部分を全て抜き出したもの。また事務報告書には掲載されていない、市の関連施設の報告書からも併せてチェックして送ってもらいました。あれがないと、ほかにもう少しあるのではないかという疑問が出てきちゃう。記述の仕方はそれぞれ多少ばらばらでも、市役所がやっている事業をとにかく全部つかんでみることができてよかったと思います。ありがとうございます。

その上で、私が発言する前提は、この会議の始まりからですが、諮問に「ライフステージに応じた学習機会の充実のための方策」とある、「方策」というのは、行政のやる方策という意味だと思いますが、私は、市役所や教育委員会自身が提供している学習機会・事業をチェックし考えることではないのではないかと正直思っています。

市民が自分のライフステージに応じた学習機会を、流されないで、折々に自覚して、自分を捉え直しながら、今必要なものは何かと考えながら獲得していく。市役所や教育委員会がやるのは、そのための市民への情報提供とか、主体的に生きていくための啓発とか、そういうことの行政責任はあるだろうが、学習事業そのものの提供は、やっているものもあるしやっていないものもあるみたいなことでいいのではないかという立場でいます。なので、やっている事業をチェックして、こんな事業をしてないのじゃないかというようなことを言うつもりは私自身はありません。

ただ、取っかかりとして事務報告書を参照して、市役所及び教育委員会が直接に市民のための学習や情報提供をする講座等は、どんなことをやっているかをチェックすること自体はあっていいとは思っています。

その上で、資料を読ませてもらって、諮問の問題意識の「ライフステージに応じた学習機会」に直接関わるような切り口の講座というのが随分少ないなとは思いました。もちろん、市役所ではそれぞれの課の課題のための啓発を市民にどう提供するかということだから、それ自身は、人生のそれぞれの時期に応じた啓発や学習をどうするかということとは直接は関係なくて、例えば子育てであるとか親子関係であるとか、あるいは消費者教育みたいな課題をそれぞれの課では取り組んでいる。各課の課題の一環として、市民に向けた講座もするというところだと思います。例えば子育てをするのは、ライフステージにおける一定の年齢層や一定の時期の課題ではあるにしても、育児自体がライフステージそのものの課題かということそうではないでしょう。

そう考えると、ライフステージに応じて、人生のこのぐらいの時期だからこういうことが必要だというような、諮問にかみ合うような切り口の講座は極めて少ない。ライフステージを自覚しながら今の自分の課題を見つけようみたいな啓発講座の実践もあるかと思っていたが、そういうのはどこもやっていないという感じはしました。それはどこがやるのか、生涯学習課なのか、公民館なのか分かりませんが、改めて諮問として与えられてみると、そういう視点で市民に対して啓発するような機会というのはむしろあっていいのではないかという感じはします。

細かく切ったライフステージ論は、時代的にはほとんど不可能だと思いますが、人生のそれぞれの時期にこんなことが課題になる。時代や社会に流されないうで、自分なりに方針を立てて考えていこうみたいな、人生の啓発講座はどの課でやるのか。独自の担当のある市役所各課では違うから、生涯学習課か公民館か、市長室なのかは分からないが、市役所のどこかでそういう講座はあってもいいのかなみたいな感じはしました。

生島議長 ありがとうございます。今の御意見に関連する、または異なる意見でも結構ですので、いかがでしょうか。

田代委員、お願いいたします。

田代委員 今と同じような意見ではあるんですけど、この表を見ていて、これだけやっているのならもういいんじゃないのみたいな話と、ライフステージというのにつながらないなみたいなところがありますよね。今の御意見だと、ライフステージに合ったいろんな講座とか、そういうものをつくっていったって、生涯学習みたいなものに流れをつくっていくのがいいんじゃないかみたいな話もありましたけど、テレビでよく出ている歴史家の磯田さんという方がいらっしゃるんですが、その人の話を聞いていると、知識というのは断片だと言うんですね。知識は断片で、一つの知識だけを習得しても、それは全くとは言わないけどあんまり意味のないもので、幾つかの知識を重ね合わせて、そこで初めて自分にとって有意義なものになってくるみたいな話をしていこうだったので、それはそうなのかなと。

例えば、子供が生まれたときは子供が生まれたなりにそれを勉強して、子供をどう育てていこうとか、反抗期になったらどう親として対応していくんだとか、それから大学、それから社会人に独立するとか、そうすると、あとは夫婦でどうやって生活していくんだとかという、人生にとっていろんなライフステージがあるわけで、そこでどう生きていくかみたいなのをどうやって勉強していくんだらうと。そうなったときに、全てを一つの流れでやるのではなくて、1つ1つにいろんな講座とか、あとはいろんな人の考え方とかを吸収して、それで自分の人生を向上させていくみたいな話になってくるのではないかとということで、たくさんいろんな講座があるんですけど、もうちょっとまとめ方を変えると個々のライフステージに合った意義のあるものに変わっていくのかなと思って。これは、ただ、要は羅列しているだけなので何のつながりもないけど、どこかつなげていけるんじゃないかなということで、ばらばらめくりながら、何の意味があるんだらうみたいなものもありますけど、そうやってつなげていくと必要なものが出てきて少し分かってくるのかなとは思いました。

以上ですね。

生島議長 すみません、今のつなげるというのは、何と何をつなげる……。

田代委員 だから、それは見て、ライフステージごとに、同じ人であってもそのときはこのことを勉強するのがいいんじゃないかなということで、それを生かしながら次のステージのときにはまた別の講座を聞きながら、それを自分の考え方で、ある程度、前に勉強したことを生かしながら聞いていくみたいなことで、どんどんつなげていくのかなみたいには思いますけど。

生島議長 1つの講座だけではなくて、複数のところに関わってということですね。

田代委員 ええ。

生島議長　ありがとうございます。

いかがでしょうか。

内田さん、お願いいたします。

内田委員　ライフステージに応じた学習機会のために、それぞれの今ある事業の中から特徴的なところをピックアップしてということで整理してくださったものを拝見させていただいて、ざざっと最初に送られてきた事務報告書に一通り目を通して、たくさんあるんだなと思いました。と同時に、今回の表にまとめたいただいた事務報告書のほうは、ライフステージに応じたというよりは、どちらかというと高齢者とか、一部の子育てのところというように、なかなか働きながら、ま、できなくはないと思うんですけども、若者とか、子供たちとか、割と30代40代ぐらいまでの人が参加するのは難しいような部分が多いなと。あるいは、興味・関心を持ちにくいところがあるんだろうなというのをこっちの事務報告書の束を見ながら感じていたんですが、一覧にさせていただいて、そういう事業がやっぱり多いんだなというのがよく分かりました。

一方で、送っていただいた中で、矢川プラスのところですか、あと芸小ホールの方の事業報告書を見ると、こちらはどちらかというと、まさにライフステージに応じた内容がすごくたくさんあるなと率直に思いました。

例えば、矢川プラスは、赤ちゃんもそうですし、幼稚園児もそうですし、小学生、中学生、高校生、そして大学生もあるし、その上で産後ケアとか、子育てのことだとか、あるいは大学生と高齢者をつなぐ内容ですとか、まさに全部の世代が、しかも興味が湧くような、「魔改造ワークショップ」だとか、「駄菓子屋「くにちゃん」」だとか、本当に興味・関心の湧く内容が多くて、多分参加する市民の方も多かったんだろうと思いました。イメージとしては、矢川プラスでやっている事業の内容なんかは、私がイメージするライフステージに応じた学習機会に近いなと思いました。

あと、芸小ホールの方でやっていただいているのは、音楽ですとか演劇とかという切り口ではあるんですけど、音楽とか芸術という切り口だからこそ子供から若者、それからもっともっと30、40、50、それぞれのライフステージに応じた音楽の楽しみ方だとか芸術の楽しみ方が、参加をしたり、一緒にやったりとか、あるいは聞きに行ったりして、見たり聞いたり一緒にやったりして楽しめる。そういう内容が盛りだくさんあって、こういうのもライフステージに応じた学習機会になっているなというのが私の率直な感じです。

こっちの一覧にまとめたいただいたのは、割とこのことについて知りたい、このことについてもっと突き詰めたとかというのはこの一覧に入っているほうにあるんですけど、こちらのほうだと、ライフステージに応じた学習機会の充実という私のイメージからちょっと外れている。矢川プラスや芸小ホールの事業内容なんかは、私のイメージであるライフステージの学習機会の充実の内容が盛りだくさんあって、結構いろいろあって楽しそうでいいなと思ったのが感想になります。

以上です。

生島議長　ありがとうございました。

今、大森委員にも来ていただきましたけれども、一覧を作ってもらって、まず見ていただいて、率直に御感想をそれぞれお聞きしているところです。

ありがとうございました。まず、どんどんと出していただこうかなというふうには思っております。いかがでしょうか。

横山委員、お願いいたします。

横山委員 私が最初に思ったのは、本当に手広くいろんな講座をつくられているんだなというのが第一印象でした。それこそ先ほどの矢川プラスのお話ではないですけれども、ちっちゃいお子様から高齢者までのことをすごく考えて、たくさん事業をやっているのに、参加人数が少ないというのがすごく気になりました。

例えば2024年度事業報告書、くにたち文化・スポーツ振興財団ののを見ると、お金がかかると人数が極端に減って、無料だと増えてみたい傾向があったりとか、芸小ホールのほかのやつを見ると、200人以上が入る芸小ホールなのに23名だったり40名だったりでやっているということは、どうしてこんなに少ない人数なのかなというのがちょっと気になりました。もっと人数が来てもいいんじゃないかなと私も思ったんですけど。

あとは、先ほどもお話があったんですけど、私はすごく人数にこだわってしまって、例えば土曜日の何時からだどれぐらいの人数なのかなとか、平日だとどれぐらいの人数なのかなというのを見たときに、平日はやっぱり少ないんだなと。要は、講座を受けたくても働いているがために受けられないとか、こういうことを見ている余裕もないと思っちゃう人が多いのかなというのをすごく感じました。なので、まずはそういうたちに知ってもらったりとか、そういう人たちが参加しやすい環境をつくっていったらいいんじゃないかなというのがこれを見させていただいた感想です。

生島議長 ありがとうございます。少し今までと違う観点で……。

横山委員 すみません。

生島議長 いえいえ、ありがとうございます。

ほかはいかがでしょう。

寺澤委員、どうでしょう。

寺澤委員 予想以上にたくさんやっているんだなというのが第一印象ですけど、今横山委員からあったように、私もこの報告書を見て、参加人数が少ないというのが正直思ったところでした。何が足りないのかな、周知が足りないのか、それとも講座が魅力的じゃないのか、何なんだろうなと何もアイデアがあるわけじゃないんですが、考えました。

違う話になっちゃうんですけど、この間行きたいなという講座が私の住んでいた市であったんです。でも、その講座は、平日の昼間しかなかったんです。何でかなと、やっている団体の方に問合せをしてみたところ、年配の人が多いのでと言われたんです。そうか、一般的にそうだとそこしかやらないんだなと思ったら、逆に対象を絞りすぎて狭くしているところもあるのかなと。これらの人数が少ないのも、もしかしたらそうやってある意味対象を絞りすぎているがゆえに参加したくてもできない人がいっぱいいて少ないのだろうか、魅力的な講座もいっぱいあるけどって開催日を見ると、確かにこれじゃ働いていたら行けないなと思いました。すみません、ちょっと話がそれました。

生島議長 ありがとうございます。

いかがでしょうか、松塚委員。

松塚委員 ありがとうございます。非常に多種多様な事業をやられていて、今日こちらにリストアップしてくださったのは非常に分かりやすくて助かりました。ありがとうございます。

健康や体力づくり、生活、文化、教養、趣味を高めること、こういった事業は多様で充実していると見受けました。一方で、6月25日の委員会で、資料3として配っていただいた「市民の意識調査結果報告書」では、「どのような生涯学習活動に取り組んでいますか」という質問に対して、「健康・体力づくり」、「生活を楽しむ」、「趣味・教養」に続き「職業上必要な知識・技能を身につけると」というニーズが30%近くにまで達しています。

本日リストアップをしてくださったのを拝見しますと、例えば1ページ目の中ほどのところに障害者を対象にした職業訓練に関する事業、2ページの343の労働・雇用情報提供に係る事業、これは別途資料を頂いている中では343ページの黄色のマーカー2の「女性を対象とした就労支援セミナー・個別相談会の開催」が該当するのではないかと思います。

マーカーで示されている343ページに関しましては、労働費・まちの振興課と左上に記されております。まちの振興課でこのような就労支援的な活動をしていて、それを一つの生涯学習としてリストアップしてくださったというふうに理解できます。一方で、こちらの『生涯学習振興・推進計画』、これも第1回の会合のときに頂いたものですが、まちの振興課がやっている事業というのは、消費者講演会、大使館訪問スタディバスツアー、LINKくにたちなどになっていて、労働関係の事業は必ずしも振興課とひもづいていないという印象を受けました。

何を言いたいかといいますと、第一に、就労支援というものを生涯学習の中でどのように市のほうで位置づけていらっしゃるのかということが少し分かりにくかったということ。第二に、生涯学習をライフコースの中で考えていくという観点からいうと、就労支援というのはライフコースの中に位置づけるのが難しいのかということ。しかしながら、今回女性を対象とした就労支援セミナーをあえて生涯学習として位置づけたのは、例えば妊娠・出産が終わった後に就労支援をするということからライフコースという観点でリストアップしてくださったのかということ。だとしますと、黄色でマーカーされていないものの343ページの「シニアを対象とした就労支援イベントの開催」、これはシニアということで、55歳以上の方を対象としたということでは、ある意味ライフコースを意識しながらセミナーを位置づけたというふうにも見えます。

この辺り、意見とかコメントというよりも、どのように枠組みを考えていいのか。ライフコースと就労支援との関係性、また就労支援に関する事業と調査結果との対応性などが少し見えにくいような気がいたしました。

生島議長 ありがとうございます。今のは、事務局にお尋ねしたほうがよろしいですかね。

松塚委員 そうですね。できれば。全てが系統立てていなければいけないということではなく、これから議論していく基盤として、生涯学習の中に就労支援というものをどのように位置づけていくのかということ、まずそこを確認させていただいたほうがいいと思っています。特に、6月25日の資料の中で、「職業上必要な知識・技能を身につけること」、これが生涯学習活動の中に明確に位置づけられているという実態があるわけですね。おそらく本日のリストの中にも就労支援の内容が、私が気づいたほかに、精査すると入っていると思うんです。しかしながら、ぱっと見た感じでは、どこの課がやっているのかということもよく分からない。ライフコースの中でどのような位置づけ方をしていくのかということを考える上でも、そこは重要になるのではないかと思います。

事務局 事務局です。今回マーカーを引かせていただいたところについてなんですけ

れども、皆様になるべくいろんな事業を知っていただくために、大まかに、こちらで特にすごく絞ったという感じではなく、幅広く引かせていただいたというのがあります。今松塚委員がおっしゃっていた就労、職業とか、そういうものについては、こちらでマーカーを引いているつもりではいたんですけども、これだけ資料が多い中で、申し訳ありません、見落としをしてしまっていたというところもあったかもしれません。 以上です。

事務局 今も漏れてしまったかもという話がありましたけれども、こちらから、これは議論に含めてもらいたいとか、含める必要はないとか、そういう意図を持って引いたものではないというところはまず御理解いただけたらなと思っております。

生島議長 堀委員。

堀委員 配布された資料は、事務報告書及び矢川プラスのような市の関連施設の事業報告から、市民参加なり、市民に啓発している事業をピックアップして全部抜き出した性格のものでしょうか。それが生涯学習計画に入っているか入っていないかということではなく、役所全体の中で市民に参加させる行事をどれだけ組んでいるのか。今、市がやっている全体を見せてもらったということですよ。だから、それをどう評価するかはこちらの問題でしょう。例えば、こういう事業が多いがこういうのはないとか。就労支援関係ならこういう資格のものはあるが、こういう資格のものはないとか、この課とこの課がダブってやっているとか、この課でもやるべきではないかというようなことは、こちらの判断の問題ではないのかな。

事務局 事務局です。今堀委員におっしゃっていただいたように解釈いただけると助かります。

生島議長 松塚委員、いかがでしょうか。

松塚委員 『生涯学習振興・推進計画』の中の31ページから「事業の目的・内容」というのがあって、ここが網羅的に担当課と、事業の目的・内容、さらにライフステージに応じた学習機会の充実ということで、重点施策として明確に書かれていて、とても分かりやすいです。多分、ここに一定程度合わせてこちらのリストの内容を位置づけると、分かりやすいと思いました。また、調査報告は大変大切だと思っていまして、市民が何に取り組んでいるかということが一定程度見える調査結果がありますので、こちらとも併せて事業内容を整理していくと分かりやすいと思いました。ただ、分かりやすさをこの委員会で求めているわけではないのだとすると、それはそれで問題はありません。

生島議長 事務局いかがでしょうか。

事務局 事務局です。1点補足としましては、今松塚委員が御指摘の計画の中に重点施策として載っているものの中で、各個別の事業というのが掲載されているとお手元にもし計画をお持ちの委員がいらっしゃれば御参照いただければと思うんですけども、こちらの事業は確かに掲載しておりまして、計画策定当時のものとなりますので、それを今直近で、直近といいましても令和5年度にはなりますが、具体的にもう少し細かく各事業をピックアップしたものが今回お

手元にA 3でお配りした一覧というふうに……。厳密に言うとイコールのものではないものもあるので、厳密には1つ1つは照らし合わせられるものではないものも入っているかと思うんですけれども、大まかには今申し上げたように御理解をいただけると少し分かりやすくなるかなと思います。

松塚委員 大変よく分かりました。そうしますと、取り組んでいる中の「職業上必要な知識・技能を身につけること」の項目は無視できないのではないかと考えます。特にライフステージというものを考えるときに、子育てが終わったとき、もしくは子供を産んだ直後だとか、結婚の前後もですね。あとは、退職した前後にライフステージに即して市民の方がいろいろ考える時間というのがきつとあるように思いますので、今私はここにいるのよねというふうに考えながら学びを求めていくというのは十分に考えられると思います。

生島議長 今の御意見というのは、事務局に要望するみたいな話ではないので、そういう視点を持つというのもあり得るんじゃないかということで、こちらで引き取らせていただいてもよろしいでしょうか。

松塚委員 はい。

内田委員 すみません、今の松塚委員の御意見は、就労支援と、いわゆるリカレント教育みたいなやつは生涯学習に両方含まれるのかどうかという確認だったんですか。そういう話ではない？ リカレント教育的な考え方というのは、ライフステージに応じた学びというか、生涯学習の中には入りますよね。でも、就労支援というと、就労の相談だとか、就労機会をつくるとか、そういうものまで入れちゃうのは広過ぎちゃうから、その辺が、生涯学習というふうな切り口で考えると、リカレント教育みたいな内容については入れるけれども、就労支援となると内容が広くなり過ぎちゃうから、その辺りをどこまで入れ込んでどういうふうにしていったらいいのかというような御意見だったように思うんですが、私、聞き方が違いますかね。

松塚委員 私の言葉が足りなかったと思います。例えば、343ページ、「女性を対象とした就労支援セミナー・個別相談会の開催」、これは（就労支援と生涯学習の）両方にとれますよね。6月25日の市民の意識調査結果報告書の中の、「職業上必要な知識・技能を身につけること」、これも支援でありながらリカレント教育・学習も入ってくると思います。ただ、支援というのは生涯学習とはちょっと違うというふうには思っております。ですから、就労支援という意味合いを持ちながら、職業上必要な知識・技能を身につける、もしくは情報を入手していくというような、具体的にはそのような活動になっていくのではないかと私は理解していましたけれども。

内田委員 そういう意見だったように思うので、だから、御意見というか、事務局に聞いたかったことは、就労支援全部を含めるんじゃなくて、いわゆる職業に必要な知識を得たりだとか、就労に必要な知識や技能を得るような事業内容については今回我々が考える内容の中に入れていきますよねという確認をしたかったのかなって。

松塚委員 そうです。

内田委員 いいですよ。それは、どうなんですか。そういうことなんですかね。

今、そこには直接答えられていなかったような気がするんですけども、就労支援全般は含まれないが、就労に必要な知識の伝達ですとか、セミナーですとか、講演会みたいなものについてはライフステージに応じた生涯学習の中に含まれますよねという確認を多分松塚委員はされたと思うんですが、それによろしいんでしょうかという答えを私は御意見を聞いていて聞きたかったんですけど、その答えはいかがでしょうか。

生島議長 事務局、お願いいたします。

事務局 今回事業を黄色くマーカーでピックアップさせていただいた中で、ライフステージに応じたというところでピックアップさせていただいたところもありますので、その関係で先ほど来お話に上がっています343ページの「女性を対象とした就労支援セミナー」というのは入れさせていただいている。

一個下の「シニアを対象とした就業支援イベントの開催」が漏れていたのは、単純に事務局の漏れでございます。ですので、そういったものが含まれるのか含まれないのかといったところも含めて皆様に御議論いただけるように、レンジを広く黄色いマーカーを引かせていただいたということになります。

生島議長 よろしいでしょうか。

内田委員 分かりました。

生島議長 1点確認なんですけれども、6月25日にあった市民意識調査結果なんですけど、これ自体は市にどういうことを求めているかという調査ではなくて、実際に市民がどういう学びをしているかということの調査なわけですよ。ですから、そういう意味では、健康づくりに関わることとか、趣味・教養のほかにも、市民が職業上必要な知識を身に見つけることというのを自分の学習活動としてやっているということは、例えばそういう時間を割いているということの実態だと思うんですね。

ただ、実際に今ここに述べられているもの全てが、例えば市でフォローしていかなければいけないということともちょっと違うかなと思っていて、個別具体的な、例えばパソコンだとか、今ですとAIに関するスキルだとか、プログラミングとか、そういうことが全てつながってくるわけではないので、今回ここで議論していくときには、市としてどのような方策を取っていくかといったときのある程度のベースというのをお考えいただいたほうがいいかと思います。なので、市民の学習ニーズ実態はそうなんですけど、これが全て反映されるということでもない。だとすると、市としてどういうことを考えていくことが必要なのかという視点を持っていただくための材料にしていいただければいいかなというふうに思いました。

松塚委員 そのとおりだと思います。ただ、リカレント教育、例えばPCの使い方を学ぶというような事業の実施母体には市はならないとしても、その情報に結びつけていくだとか、そういった機会がありますよというようなセミナーを開催するとか、多岐的なアプローチの仕方があると思うんですね。ですから、リカレント教育とか就労支援というふうに切り分けることができないと思います。その辺りは、慎重にならざるを得ないと。

生島議長 ありがとうございます。

荒井委員、いかがでしょうか。

荒井委員 私も、就労の支援のところは気になってマークはしたんですけど、55歳以上となっていて、あれ、シニアって高齢者じゃなくて55歳以上も言うんだなというのがここで初めて分かって。高齢者は、今4分の1だか3分の1だか、すごく世の中で増えているから。

全体に今回の事業の一覧表を見て思ったのは、私は高齢者を割と視点にして、高齢者のものはどんなものがあるのかなという視点では見ていたんですが、少ないし、ずれているし、さっき寺澤さんがおっしゃったみたいに、これって高齢者だけに絞ってこんな内容にしているのかなみたいなものが、何かばかにされているようなと言ったら言い過ぎですけど。

むかしのくらし展関連イベントで「蓄音機でレコードを聞いてみよう」というのが財団のほうであって、あとは「わら細工教室 わらぞうり作り」とか、レコードというのがSPレコードで、ええ？ みたいな。今の高齢者は、SPレコードは多分なじんでいないし、それはもっと昔の人が江戸時代のものを見えるという感じかもしれないので、「むかしのくらし」というんだったらもっと昭和の時代のものとか、もうちょっと下げたほうがいいんじゃないかなって。

あと、「わら細工」で関連するところは、子どもの夢・未来事業団なので矢川プラスですよ、「しめ縄作り」と書いてあって、でも、これは今だったら働いているお母さんなんかも行って、しめ縄というよりはわらのクリスマスリースとか、そういう実用的なもの、持って帰って使えるみたいな、そういうものだったらもっといいのになみたいな、何となく「むかしのくらし」とか「わら細工」とか、そういうものがずれている気がしました。

あと、これも財団なんですけど、天体観測なんかがあって、子供さんはいいなって。子供対象のものはいっぱいあるんだなって。そういうものに触れる機会は大事なんでしょうけど、子供もですが、大人も楽しめる天体観測とかがあるといいなと思いました。

公民館の屋上って、後ろ側が一橋大学なので本当に真っ暗で、すごく天体観測に適しているというところがあって、あそこでビールを飲みながらみたいなのができたらすごくいいなとか、そういうふうに思ったこともあるので、子供だけじゃないものがあるといいなと。

あと、ママ向けもすごく多いですけど、パパ講座というのが財団のほうであって、市のほうでもパパ講座ってあるんですけど、もうちょっと展開の仕方がないのかなって思いました。

ライフステージ、と諮問ではいうんですけど、ライフステージじゃなくて「しょうがいしゃを対象に」とか、しょうがいしゃのライフステージがあるはずなんだけど。しょうがいしゃを対象にした事業というのは、「しょうがいしゃ青年教室」というのがあって、そこでいいなと思ったのが、多分体育館でやっているのかなと思うんですけど、ボッチャ体験教室。ボッチャのくにたちカップ2023というのがあって、それは練習をして、あとは発表というか、試合の形でみんなに見ていただくような機会があって、いいなと思いました。それって、しょうがいのある人だけじゃなくて、一般の大人とかも見に行って、こうやっているんだとかって、そういうのを楽しめたらすごくいいなと思いました。

あと、国立市が出している、これは健康まちづくり戦略室みたいですけど、「いい日くにたちおでかけマップ」というのが新しくなったらしくて、すごくすてきだなと思って見ていました。健康づくりのためにいろんなコースを設定しているから、自分で歩きなさい、みたいなことだと思うんですけど、田代さんがおっしゃったみたいに、市民はそれぞれにいろんな歴史があるので、自分に応じた健康だけでなく文化とか、歴史とか、自然とかを自分で探求しながら歩けるとか、そういう重層的な遊びができるような、そういう企画があっ

たらしいなと思いました。すごく興味深いものはいっぱいあったんですけど、高齢者に向けてはちょっと少ないかなと。

あと、ユースワークというのが財団のほうにあるのと、市のほうの事務報告書にも、294ページに「自分たちの居場所づくり」という、「中高生ローカルセッション」というのがあって、ユースワーカーのほうは「ユースワークのあるまち」というのでやっていて、これはそれをつくっていかうとする人たち。それから、市のほうの「中高生ローカルセッション」は、「自分たちの居場所づくり」なので、中高生自身が自分たちで考えるものだと思うんですけど、とても面白い試みだと思いました。思春期の悩みとか、いろんなものがあるんですけど、以前「家出のできるまちづくり」というのを聞いたことがあって、そんな構想が国立市にあったらすごく楽しいだろうし、中高生じゃなく、結婚しても年を取っても家出をしたいことってあると思って、そういうのがベースにあって、誰でも家出できるまちだったらいいなとか、そんなことを思ったりしました。

すみません、自分の希望を……。

生島議長 ありがとうございます。確認ですけれども、郷土文化館でやっている「むかしのくらし」の事業というのは、高齢者向けでやっているという——ではない？ 今、荒井委員はそう受け止められて……。

荒井委員 スポーツ財団のほうの14ページに、いろいろあって、郷土の伝統文化を学ぶ体験事業とかがあるんですが、「だんご作り」とか「七夕飾り」とかいろいろある中で、30番で「わらぼうし作り」というのがあって、これは、だから、子供さんも作ったりはするのかもしれないんですけど、わら草履って、持って帰って使いますかね。

生島議長 なるほど。この事業に関しては、前期とか前々期でも結構お聞きしていたので、私からでもいいのかもしれないんですけども、補足で事務局からお伝えいただければと思います。

事務局 まず、財団の事業報告なんですけれども、財団が事業一覧でまとめたページをうちのほうで抽出することなくそのまま掲載させていただいていますので、これについては財団がやっている事業を全部ここに資料として掲載させていただいているという前提がまずございます。

その上で、「むかしのくらし展」ですとか「わらぼうし作り」、あと「天体観測」なんていうお話もあったかなと思うんですけども、これについては特にこの辺の年代対象を想定したものではなく、全市民が対象となっている事業かなと思っております。

生島議長 博物館なので、そういう意味では民俗を自分たちで体験してみようということなので、むしろ子供たち向けにやられていたりだともしています。ただ、そうは言っても、荒井委員がおっしゃった、この事業に限らず、高齢者向けの事業で実態とそぐわないものがあるんじゃないかというような、今例に挙げていただいたものだけに限らずあり得るかなとは思いつつ伺っていたところではありました。

つまり、これ、以前、公民館の子育ての保育室のお話でもありましたけれども、実際保育室の予算をつくっていてもなかなか保育室を利用する人がいなくなっているとか、そういう学習者の実態、昔イメージしていたライフステージの実態と今の実態がそぐわなくなっているんじゃないかとか、そういう視

点というのはあり得るかなと思います。

今もはっとさせられたのは、障害のある人もライフステージというのがあるんだ、なのにそこがひとくくりになっているなというところというのは、伺っていて本当にはっとさせられるところかなと思いました。

荒井委員 公民館の保育室の保育士報酬が余るということを前回私は申し上げて、ちょっと誤解を生むかもしれないと思って補足させていただきたいんですが、予算に対して執行額が少なかったのも、不要になった額は70万ぐらいだったそうです。この前、公民館の職員の方にどうしてですかと聞いたら、講座が大体3月に終わります。3月に終わったら、自主グループというのを前だとして、次の年度もまたグループになって保育室を利用するというのがずっと国立公民館の保育室利用者で続いてきたんですが、3月に保育園へ入れますという、前とは違って今は保育園がすごく充足して、だから3月に入れますとなったなら、保育園に入って仕事復帰しますということが多くなっているそうです。公民館保育室は、国立は団体継続の方のみ利用できるというルールがあります。幾ら若いママ対象の講座でたくさん人が来ていても、子供が預けられないから行けません、みたいなことがたくさんあって、でも単発利用は不可なんですね。そういう要望は昔からあるんですけれども、先月の講座でもそういう要望はありましたというのを聞きました。でも、グループを育成していくというのも公民館の一つの働きなので、そこのところは保育の予算が要らなくなるということではないということも補足したいと思います。

生島議長 ありがとうございます。単発利用ができないというところがあるということですね。ありがとうございました。

途中からだったので、申し訳ありません。大体こういう話をまず皆さんと共有をしていたんですけれども、大森委員、いかがでしょうか。

大森委員 ちょっと視点がずれちゃうかもしれないんですけれども、頂戴した資料の中で私が注目したのは、教育費の公民館の資料なんですけど、施設利用、年間利用回数が5,253回となっているんですね。本当にたくさんの公民館を利用した事業や学習会が行われているということが改めて分かりました。

利用者の内訳も見てみたんですけれども、公民館公用利用、公民館が主催した学習事業はここに区分されると思うんですが、これが678回で、大変大事なものだと思うんですけど、同時に、延べですがサークル利用団体が4,575回になっているんですね。そうすると、年間利用回数5,253を分母にすると、87%なんですね。

これは私自身の経験になるんですけれども、先日も「市民のひろば一憲法の会」というグループが主催した立川の学習会に参加したんですが、私自身が学習者の立場で、本当にこの学習会は意味があったなという学習会って、市民が企画をしてお店を開いている学習会がすごく多いんですね。市が主催する、公民館が主催する、あるいは図書館が主催する事業が重要であるということは大前提なんですけれども、どうしてもこれまでの蓄積された知識とか理解の中での事業展開になるのに対して、市民は本当に数も多いですし、様々な問題意識を持っていて、自分自身の切実な問題を解決するために学習会を開催したりすることがあるので、そこに本当に宝があるなというふうに思うんですね。

何が言いたいかというと、公民館や図書館が主催する、郷土館が主催する事業の重要性は大前提としながら、市民自身が主催する学習会、ライフステージとの関係でもそこに本当に宝があるというのが国立に限らない実態ではないかなと思って、この回数に注目して拝見しました。

生島議長 ありがとうございます。

一通り今伺いました。皆さん、様々な視点で見ていただいていたと思います。私自身も、これを見ていきながら、特に一覧が、私がこういうものがあつたら多分もっと分かりやすいんですけど作ってもらえますかをお願いしてやっていたんですけれども、一つは、多分皆さん方からお話があったとおり、行政側が求めている市民に知ってもらいたい課題ということについての様々なセミナー・講座というのが開かれているんですが、非常に分断的であるという感じはしました。だから、もう少しつながったりとか、多様な視点で重なり合っていくと学びが深まっていくような視点になっていくんじゃないかというふうに思いながら見ていたのと、もう一つは、先ほど事業の主催者と対象者という話がありましたけれども、先ほどの荒井委員のお話にあったように、その学習をきっかけにして学習グループができていったりとか、その後自主的に学びを深めていく。その延長線上には、恐らく先ほど大森委員からお話のあったような、市民がもっと自分たちで学びたいという思いを高めていきながら、それをより公共的なものにしていくという、そういう動きにつながっていくプロセス、後押し役にこうした公的な社会教育の実践支援というものがあると。というふうに見ていくと、この講座自体も、例えば子供を対象にしているけれども、その背景に大人のボランティアが活動をしながら、大人の人たちも学習として捉えてきているという、参加だったり、高齢者も、ここをある意味、子供向けにやっているけれども高齢者の参加の場にもなっているという重層的なタイトルも見えていかないといけないなというところに気づかされていくところではあります。

その意味で、ライフステージというものであるとか、または社会的な課題について、それぞれの世代が持っている課題をどう捉えていくかといったときには、事業一覧をぱっと見て、これだけあるんだと思いましたけれども、この1つ1つについてももう少し多角的に見られるのかなというふうには思ったところでした。

もちろんそうではない一般に広く課題提供しているというのもありますけれども、それだけじゃない、特に公民館とか社会教育施設、または矢川プラスなんかがやっているものに関しては、ただ主催者と対象者というだけではない関わりというのをもう少し捉えていくことで、少しライフステージをつないでいく、または先輩の姿を見ていくとか、そういうことが捉えてこられるのかなというところではあります。

実は、大森委員からも本日資料の提供がありました。どういう文脈でお考えになって資料を提供されたかということも含めて御紹介いただけたらと思います。恐らく、今回の意識もあってということだとも思いましたので……。

大森委員 お時間をいただいてしまいすみません。ライフステージにちゃんと結びつけていきたいなというふうに思うんですけれども、まずは学習機会の充実、一般論として大事なということにはなっているんですが、それがどれほど大事なのかということを経験できたかなということでのこのペーパーを作らせてもらいました。

結論から申し上げたほうがよろしいと思うんですけれども、下から3分の1のところの小括というふうに書きました。ライフステージの学習の機会というと、子育てをしている時期とか、子供の立場から言うと自分自身が育っているライフステージがありますし、それから子育てをしている世代ってすぐに今度親の世代を介護する年代に差しかかりますし、今度は自分自身が介護される年代というふうになると思うんですね。ライフステージはそういった形で整理

されることが多くて、そこに意味もあるんですけども、小括のところの結論めいたことと言うと、子育ても親の介護も真空状態の中で行われているわけじゃなくて、歴史の中で行われているということが大きいのかなと思うんです。

具体的には、子育て一般ではなくて、2011年の原発災害下でどう子育てをするか、そこで保護者は本当に悩んだし考えたんですね。それから、介護というふうに言われますけれども、1945年に敗戦へと至る戦時下で傷ついた経験を持った人たちって日本は本当に多いんですが、そういう親のことを、実はそういう傷ついた親の下で育った子供が介護するという、これは相当大変なことだと思うんですけども、そういった大変なこととしてはなかなか取り出されないことが多いと思うんですね。

こうした切実な課題への手がかりを、社会教育は提供してきたと思うんですね。そういったことをさらに整理できると、一般論だけではなくて、本当に社会教育というのは大事なものだということになるのではないかというのが結論めいたところですよ。

その結論を導いたのは、本当に卑近な私自身のことなんですけれども、私は1965年に生まれたんですが、母親は1938年2月生まれですから7歳で東京大空襲を経験している、そういう親の下で生まれたということになります。

2003年に、私の家庭に子供が生まれたんですね。そのとき、私が37歳でした。住まいは所沢だったので、その公立小学校に入学するんですけども、2011年の3.11のとき、3月23日だったんですが、皆さん、御記憶がございますでしょうか。東京都の金町浄水場、葛飾にありますけれども、水道水1キログラム当たり210ベクレルの放射性ヨウ素を検出したと発表しました。東京都は江戸川から取水する金町と三郷、2つの浄水場から配水される東京23区、武蔵野、三鷹、町田、多摩、稲城の各市の住民を対象に、1歳未満の子供に水道水を飲ませることを控えるよう要請したんですね。自治体によっては、防災無線で水道水を飲まないようにということもあって、多くの子育て世代の親は、これは大変なことだということは理解したんですけども、ここにある幾つもの専門用語、ベクレルとか、それが基準値を超えているといった場合、基準値とはそもそも何なのかとか、これは私がそうだったんですが、そういったことをほとんど知らないままただおろおろするということだったと思います。

でも、そのことを学習する機会って、私自身はなかなか訪れなくて、12月には、今度は飲物ではなくて空間、子供がいる保育園だったり保育所、小学校が放射性物質に汚染されましたから測定をしていますよというお知らせが所沢市からありました。これも大変なことだという感覚は受け止められたんですけども、マイクロシーベルトとは何かとか、それから線量等基準とは何かということが分からないと実は分からない話なんですね。

私の場合は、2014年9月だったんですけども、小金井市民が企画し小金井市公民館で開催された3.11後の子育てをテーマとした学習会に参加ができたんですね。そうすると、そこで市民が原発災害下における子育ての不安を語り合い、学校給食の改善について経過の報告を交わしていました。

小金井の場合は、歴史があって、これは小金井市長の言葉なんですけれども、原発事故があったとき、小金井市の職員の中に原発災害の対応について専門的知識を持っている職員は1人もいなかったとおっしゃっているんですね。これは多くの自治体がそうだったんですけども、それでも小金井市の場合は、86年ですかね、チェルノブイリ原発事故があったときに、汚染された食品が国内でも流通しましたから、小金井市民が放射線の測定をする必要性を市に訴えて、市も全部予算措置はできないけれども、放射性測定器までは買いますよと。運営は市民でやってくださいという形で、市民と市が協力する形で放射

線の測定をしていたので、それでも小金井市には知見が蓄積されていて、内閣府もすぐ小金井市に見学をしに来て食品の測定の仕方とかを勉強したというところなんですけど、そういう市だったので、学校給食についてはほかの自治体よりも早く測定ができたらしんですね。

専門的なことは横に置きますけれども、私自身が何に救われたかという、大変なことが起きているのに、そのことを整理したり、問題の大きさに対応した思考を巡らせたり、表現をしたりということが本当になかなかできなかったんですね。でも、この学習会に参加することによって、お母さん世代が多かったんですけど、そういった大きな問題をなかったことにするのではなくて向き合っている人たちの姿を見て、物すごく励まされた気がしました。

そこで、ちょっと割愛しますけれども、子供に保養といって放射性物質の汚染が少ない地域で数週間暮らしてもらうということがチェルノブイリ原発事故の後ウクライナでは一般化しているんですが、日本も文部科学省が若干それに関して予算はつけたんですけども、基本的には市民が自主的にやる世界になって、私はつてがなかったんですけど、学習会に参加したことで、自分の子供も岐阜県に保養に連れていくことができたらししました。

これが子育てなんですけれども、直近のことと言うと、私の母親は一生懸命私のことを育ててくれたと思うんですが、なかなか表現が難しいんですけど、子供のとき、家の中が何か暗いんですよ。重苦しいんですね。その正体はまだつかめてはいないんですけども、一つに、母親が東京大空襲に遭って物すごいものを見るわけですね。死体の山をくぐり抜ける、母親の母親、だから私にとってのおばあさんは早く亡くなっているの、そういったつらい気持ちを自分の身近な親に相談する機会もなかったりして、多分困難を抱えていたことが重苦しさにつながっているのではないかとまだ推測している。ですから、最近新聞記事で、本人の問題だけじゃなくて、戦争の被害を受けた家庭で育っている人たちがいかに苦労しているかという話が、ようやく戦争から80年たって光が当たって、ぜひこれを勉強したいなと思っていたんですけども、図らずもこの場所でその機会を、アクセスができて参加してきました。

これは、立川市民が企画し、柴崎学習館で開催された「PTSDの日本兵家族会・寄り添う市民の会」がめざすこと」という市民が企画した学習会の講座だったんですけども、講師として招いたのが黒井秋夫さん、1948年生まれ、67歳の頃の2015年、最近ですよ、帰還兵のPTSDのことを知り、自分の父親もそうだったのではないかと思います。至り活動を始めたんですね。

私が参加してあと思ったことが2つあったんですけど、1つは黒井さんの解説だったんですが、この問題は当初から割と朝日新聞が熱心に報道していたので、別格で朝日新聞はこのことに詳しいんですけども、今全国紙全部がこのことを報道しているんですね。それは、この問題が持っている普遍性というか、それぞれの新聞社がこの問題は読者に知らせなきゃいけないとか、読者が知りたがっているということで、そういう普遍的な広がりを持ったものを戦争から80年たったところでやっと広げることができたなということを改めて知りました。

もう一つは、学習会は地下1階の会場であったんですけど、エレベーターで帰るしかないの、参加者がエレベーターに集中して帰っていくんです。そのエレベーターの中で聞いたんですけど、2人連れの参加者、私よりも年齢が高い方だったと思うんですが、帰りの道すがら、私の近いところでもこんな経験があったという形で、そのままびったりではないんですけども、講師の黒井さんが話されたことと重なることが私たち自身の生活の中にもあるんだということ話されていたんですね。そういう意味でいうと、多くの人たちがこれまで語ることができなかった、直視することができなかったことを掘り起こすよ

うなすばらしい学習会だったのではないかなと思いました。

こうしたことに、公民館であったり、社会教育が持っている価値ですよ、それは何ものにも代え難いものじゃないかなというふうに思って、卑近な例を2つほど紹介させていただきました。

生島議長 ありがとうございます。

ここにもありますように、今大森委員からも最初のところで御紹介のあった自分たちのライフステージというのが真空状態の中であるわけじゃないという、歴史の中であって、それが状況、時代的なものであったりだとか、そことの関わりの中であることについて目を向けていくと。だからこそその時々 of 現代的課題として取り上げてきた社会教育の部分にもきちんと目を向けていくことが必要なんじゃないかということとして受け止めさせていただきました。貴重な、資料に基づく御説明もありがとうございました。大事な視点だったと思います。

そういうふうに考えていきますと、今ライフステージというのをどう捉えていくか。さっき言おうとしたことはそこだったんですが、ちょっと前であれば、ある意味いろいろパターンとしてつくられたライフステージというものもあるろうかと思うんですけれども、非常に多様になったりしている中で多様性ということも考えなければいけない。一方で、今大森委員の言われたような普遍的なものもあるし、または地域特性というものもあるかと思えますけれども、そういうところの視点を持ちながら、今のライフステージであったりだとか、年代、世代、そしてそれを今度つないでいくときにどんな学習というのがあるのかということのを我々が少し深く掘り下げていくことが必要かなというふうに思いました。

私も、今日皆さん方からいただいた御意見というのをなかなか消化し切れていないところではないんですけれども、次回以降どういうふうにもう少し深めていくかということについて、視点は今言った話とかも重なるんですが、少し検討させていただきながら、皆さんにも御提案したいなと思っているところです。ちょっとそしゃくをしてと思っているところです。

一通り皆さん方からそれぞれ御意見をいただいたわけなんですけれども、それを受けて、こういう視点も必要じゃないか、特に今大森委員からも大事な話をいただきましたが、そういったことに感化されてまた感じるころがあって、こんな視点で進めてみたらどうだというようなことがありましたら最後伺いできればと思ったんですけれども、いかがでしょうか。何かありますでしょうか。

荒井委員、お願いいたします。

荒井委員 今大森先生がおっしゃったこともそうなんですけれども、以前松塚先生がおっしゃっていた氷河期世代の人の傷つきというんですかね、そういうのが世代的にはあるんじゃないかとおっしゃっていて。この間公民館であった講座で、「対岸の家事」というドラマの作者がいらして、79年生まれです、とかみんな言っていて、すごく人気があるというか、共感とかを持ってみんな質問をしていたりしていたんですけど、この世代の人って本当に傷つきがあって、作者の方がそれを戦争に例えて「傷病兵のような」とおっしゃったんです。だから、本当にそうなのかなと思って、そういう切実なものを抱えている人たちに届くような講座とか社会教育というのがあるといいなと思いました。信じられないぐらいママチャリというんですか、子供を乗せるあれがついた自転車がだーっと公民館前に並んでいて、今日は何？みたいな感じで、若い人がこんなに来るんだなと驚きました。みんないつも働いているような若い世代の女性や男性も

多かったですけど、そういう学びがあって、ここで話したようなことが浮かんだので今日報告しました。

生島議長 ありがとうございます。
松塚先生。

松塚委員 今日、「重層的」、「多様性」など大切な言葉をご指摘いただいたんですけれども、参加人数について、極端に多いイベントとそうではない催しがあるということで、少ないから必要性が低いということではもちろんないと思っています。声が届きにくい人、声を上げられない人たちがいて、例えばこの中ではヤングケアラーとか、ドメスティックバイオレンスとか、そういったさなかにいる人たちは自分からは声を上げてこない。しかし、そこに手を差し伸べないことには、いろんな意味で社会的にも負担になると思います。個人が抱える問題はもちろん深刻なんですけれども、それがどのような社会的、公共的問題になり得るかというような観点で考えますと、声を上げられないところにアプローチしていく、それはすごく大切だと思います。

そこで、ライフコースの中でも多様性だとか重層性というところ、様々な重層的なニーズ、求めにどのように応えていくのか。先ほど時間帯でもって区切られてしまうと行きたかった人たちが行けなくなるというご指摘がありました。コンテンツは既に充実していると思うんですけれども、それが本当に必要な人間に届いているのか、届いても、その人たちが来たときに想定していた情報を与えられているのか、この辺りをもう少し議論して、現場を分かっている方々の声を聞くと分かるようになると思うと気づかされました。要は、何をつくるか、何を提供するかというコンテンツ的なものだけではなく、どうやってアプローチするのか、アクセスをつくるのは容易でも、そこに引き寄せるのは簡単ではない、その辺りも教えていただきたいと思います。

生島議長 ありがとうございます。つまり、事業づくりなり、事業をどういうふうな見方をしていくかといったときですかね。

松塚委員 重層的というのがすごく引っかかっている。コンテンツが一定でも、それを必要としている人、必要なのにもかかわらず気づいていない人たちなどがいて、それが重層性、多様性というところにも関わってくると思うんです。それに我々がどれだけ気づけるのかというのは、私なんかは自信がないんですね。恐らく、皆さんがその辺りはよく経験していちゃって、今回の検討項目の中に入っていると思うんですけれども。

生島議長 ありがとうございます。

田代委員 今で言うと、失敗に学ぶということはすごく大事で、多く来たところはいいにしても、少なかったところはなぜ来なかったのかとか、本当に需要があるのかとか、やりました、何人来ただけじゃなくて、何でこうなったかというところは、アンケートを取るなり、来られた方に聞いてみるとか、そういうのは大事なかなと思いますけど、もう終わっちゃっていることなので、それはできないので、これから分かれればみたいなのですかね。

もう一つは、ライフステージって、今までだと、おっしゃられるように簡単にお挙げになっているところがあったわけですけど、全然今は違うので、ライフステージの考え方みたいなのを変えていかないとなかなかいい答えが出ないのかなと。

例としてなんですけど、うちの職場に結構優秀な女の人がいるんですが、25歳までに結婚して、30までに子供を産んで、あとは仕事をしていくんだみたいな、そういう昔ながらの生き方みたいな人もいるし、あとは40ぐらいまで独身で、そのまま独身かと思ったら結婚して子供を産んでという、そういう人もいる。ライフステージと言いながらなかなか枠にはまらないみたいな人も結構いるので、その辺の人に対してどうアプローチしていくのかということですよ。

あと、もう一つは、先ほど就労支援の話が出ましたが、就労支援というのは東京都でやっていて、昔だと専門校というのが立川にあって、今は統合されちゃっているんですが、市がやることと都がやることと国がやること、民間がやることもあるんですけど、分かれています。ですので、その辺がはっきりしないと、なかなか、意見を言ったけど、それは市じゃありませんみたいな感じになっちゃうとそこで詰まっちゃうかなみたいながあるので、どういう答えを出していくかということも最初に決めておかないと、なかなか議論が終息していかないかなと思います。

以上です。

生島議長 ありがとうございます。

大森委員、お願いいたします。

大森委員 松塚委員が出された重層性とは何かという問いの答えまではいかないんですけども、これまでの議論で少し整理できそうなこともあって、ライフステージ論というのはある意味では超歴史的というか、この年齢になったらこうしてという世界だったと思う。ですけど、世の中が長期にわたって安定しているときには有効なんですけど、これまでのライフステージを許さないような苦しさとか困難を抱えた世代が出現しているというのが今の全体状況だと思うんですね。先ほど出されたいわゆる氷河期世代の問題でいうと、よくマスコミで言われるのは、その世代の中では結婚がかなり他の世代と比べて難しいと。そうすると、ライフステージ論自体がそういう人たちにとっては暴力的になるわけですね。

それから、国分寺の公民館の事業で冒険した企画があったんですけども、Z世代の問題を焦点に当てた講座を組んだんですが、参加が物すごく多かったんです。議論がすごく活発だったのが、Z世代論のプラスとマイナスを位置づけようとしたんですね。Z世代の発信力の強さとか、そこに光を当てることと、Z世代が抱えている様々な繊細さとか困難とか、両方を見ようということだったんですけど、そこに参加したのが、Z世代を上世代から理解したいという人たちの参加もあったし、Z世代のちょうど真ん中の人たちが自分たちのことを発信したいという形で参加をしていたんですね。

ちなみに、Z世代というのは、アメリカの人口動態論に合致した言葉なので、日本ではそのまま適用はできないので、括弧つきのZ世代で企画を組んだんですけども、まとめると、幾つかの世代に刻印された困難がこれまでのライフステージを困難にしているというのが一つ整理できるところではないかなというふうに思います。

生島議長 ありがとうございます。

堀委員。

堀委員 今、いろいろやり取りされていた話は、それ自体はすごく有効と思いますが、今日の流れの中でやるべきことなのかどうか。今日は多分もうすぐ終わりだし

ようから、はじめをつけておきたいのです。

事前に厚い資料を送ってもらい、それをチェックして、国立市各課が市民向けに行っている事業を見ました。そのことを一回整理しておくというか、その上で、また別の話として、今の話はしたほうがいいのか。そうでないと、資料とそれに基づいた今日の話が風化してしまう気がしました。

その上で、今やり取りされたことで言うと、「ライフステージに応じた」というのが諮問の文言にあるが、ライフステージ論をどう考えたらいいいのかということは、諮問の議論を始める時にはちゃんと考えたほうがいいのかというの、もちろんあると思う。ライフステージ論の有効性とか、大森さんが言われた、そもそも真空状態の中じゃない。今の日本の歴史性や社会性の中で、ライフステージ論はどうクロスするのかということ。諮問をこちらで受け止めるときの前提としての議論の必要はあると思う。

関連で言うと、今は令和7年ですが、私は、平成時代は何だったかというのは結構大きいと思う。自分も含め相変わらず昭和史とか戦後史の文脈の延長のまま社会を見ているところがあるが、それは一回途切れているところがあるのではないかと。自分はこのところ平成史関係の本ばかり読んでいます。自分たちの人生前半の、何だか前提としている昭和がどう変わって今があるのかということで、平成時代のことをずっと考えています。戦後社会、昭和の時代が平成にどうリセットされたかみたいなこともあるのではないかと。それも含め、「ライフステージに応じた」というときの前提を、もう少し考える必要はある。

だが、ごめんなさい。今、こんな自分の意見を出したかったのではなく、要は事務局から資料を送ってもらい点検して議論したことのまとめをちゃんとしておかないといけないと思ったということです。

それで私が思ったのは、いろんな課がいろいろ市民向け事業をしているのはよく分かった。それぞれの課の課題の関連で、市民へ啓発としてやっていることはいろいろある。だが、各世代の人生の必然性の中での学習と、各課が提供している個別課題は違う。市役所の市民向け事業は、各課の必然とアイデアで行われている。

そうしてみると、一つには、各課がやっている市民向け事業の全体を見せる、そういう事業企画があってもいい。何回かの講座を組み、最初のほうでは、人生のライフステージを例示し、人生の時期時期にいろんな課題が出てくる。そのとき流されるのではなく、自分で考えて主体的に選んで生きていきたいと思いますという講義をやる。その中で、そもそも国立市役所の各課ではこんな講座もやっていますという紹介をする。そういう見取り図を示すことは、国立市役所全体にとっても非常に有効なことではないかという気がしました。

どこがやるか、市役所の戦略上も大事なことになるので、もしかしたら市長室のようなところでやる可能性もあるが、普通に考えれば、所管する生涯学習課や公民館がやるのか。各世代の市民が見通しをもって生き生き暮らしていくために、そのために市役所を有効に利用するためにみたいなことで、今までにない、非常に有効な講座になるんじゃないかと思いました。

もう一つは、各課のやっている事業に個別には踏み込まないですが、いろいろやっている公民館の事業が、もう少し全体として戦略を持ってもいいかな。ライフステージ論との関連で言うと、なるべく各世代をカバーするように講座を組むような整理があってもいいのではないかと。やっている講座のそれぞれの必然性や成り行きはあるのですが、国立市に住む各世代の市民に対する目配せを持って事業をしているような意識は見えない感じがした。そういう戦略も公民館事業の組み方としてあるのではないかという感じは、少ししました。

公民館には直接は言えないので、生涯学習課の方に言いますと、生涯学習課の事業も、私たちに与えられた諮問のようなことを、市民への啓発事業として行

うことを考えてもいいのではないかという感じはしました。

資料を送ってもらい議論し考えたことのけじめとして、私はそのぐらいのことを言っておきたかった。

生島議長 ありがとうございます。堀委員から、全体のまとめという形でお話しただきましたけれども、全体をまず見てみようということで、事業評価をするわけではないので、どんなことをやっているかと私たちも実態を知ってみようというところですから、もっとこうすべきだ、ああすべきだというのはまた違うところかなと思いますけれども、今いただいた御意見というの踏まえながら今後の議論に展開できればと思いました。

そういう意味では、今日最後のほうでお話しいただいたライフステージをどのように捉えるかというポイントというのは非常に大事なところで、諮問のところにはライフステージに応じたと書いているけれども、そもそも今ライフステージというものをどう捉えていくことができるのか。例えば私たちが答申を作っていくときに、私たちが考えるイメージとしてのライフステージというのはこういうふうにした中で答申というのをまとめていくんだという、その前提を、例えば今日注目いただいた多様性であるとか、または社会的背景とつなげながら考えていくという、そういった視点を持っていくということは、これからの動きとして視点として見いだしてこられたのかなというふうに思います。

今日もそろそろ時間が来ているんですけれども、皆さん方からいただいた御意見をもう一回振り返りながら、次週の少し提案につなげていきたいと思いますので、引き取らせていただければと思います。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、今日の大きな議論というのはここまでにしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、この後につきまして、事務局から御連絡をお願いいたします。

事務局 事務局から連絡です。次回、第6回目の定例会を行う日は、10月22日水曜日、午後7時からです。場所は、今回とは違いまして、国立市役所のお隣のF S Xアリーナ第1・2会議室で行います。よろしくお願いいたします。以上です。

生島議長 ありがとうございます。

その他、御質問や、何か皆さん方からの情報提供等がありますでしょうか。よろしいですか。

なければ、本日予定しておりました案件は全て終了とさせていただきます。次回は、10月22日水曜日で、午後7時からF S Xアリーナの会場ということですので、どうぞよろしくお願いいたします。

これもちまして、本日の会議を終了いたします。皆さん、お疲れさまでございました。

—— 了 ——